

六難九易抄

弘安元年七月三日 五七歳

先づ法華經につけて御不審をたてゝ其の趣を御尋ね候事、ありがたき大善根にて候。
須弥山しゆみせんを他方の世界へつづてになぐる人よりも、三千大千世界をまりの如くに躡上にけあぐる人よりも、無量の余の經典を受け持ちて人に説ききかせ、聴聞の道俗に六神通をえせしめんよりも、末法の今日この頃ごろ法華經の一句一偈のいはれをも尋ね問ふ人はありがたし。此の趣を釈し説いて人の御不審をはらさすべき僧もありがたかるべしと、法華經の四の卷宝塔品と申す処に、六難九易と申して大事の法門候。今此の御不審は六の難き事の内なり。爰に知んぬ、若し御持ちたもあらば即身成仏の人なるべし。

此の法華經には我等が身をば法身如来、我等が心をば報身如来、我等がふるまひをば応身如来と説かれて候へば、此の經の一句一偈を持ち信ずる人は皆此の功德をそなへ候。南無妙法蓮華經と申すは是これ一句一偈にて候。然れども同じ一句の中にも肝心にて候。南無妙法蓮華經と唱ふる計りにて仏になるべしやと、此の御不審の所詮に候。一部の肝要、八軸の骨髓にて候。人の身の五尺六尺のたまし神ひも一尺の面にあらはれ、一尺のかほのたましひも一寸のまなこ眼の内におさまり候。又日本と申す二つの文字に、六十六箇国の人畜・田畠・上下・貴賤・七珍・万宝一つもかくる事候はず収めて候。其のごとく南無妙法蓮華經の題目の内には一部八卷・二十八品・六万九千三百八十四の文字一字も漏れずかけずおさめて候。されば經には題目たり、仏には眼たりと、楽天ものべられて候。記の八に「略して經題を挙ぐるに玄に一部を収む」と妙樂も釈しおはしまし候。心は略して經の名計りを挙ぐるに、一部を収むと申す文なり。一切の事につけて所詮肝要と申す事あり。法華經一部の肝心は南無妙法蓮華經の題目にて候。朝夕御唱へ候はゞ正しく法華經一部をしんどく真読にあそばすにて候。二反唱ふるは二部、乃至百反は百部、千反は千部、加様に不退に御唱へ候はゞ不退に法華經を読む人にて候べく候。天台の六十卷と申す文には此のやうを釈せられて候。

かゝる持ちやすく行じやすき法にて候を、末代惡世の一切衆生のために説きをかせ給ひて候。經文に云はく「於末法中」「於後末世、法欲滅時、受持読誦」「惡世末法時、能時是經者」「後五百歳中、広宣流布」と。此等の文の心は当時末法の代には法華經を持ち信ずべきよしを説かれて候。かゝる明文を学しあやまりて、日本・漢土・てんじく天竺の謗法の学匠達、皆念佛者・真言・禅・律の小乗権教には随ひ行じて法華經を捨てはて

候ひぬ。仏法にまどへるをばし知ろしめされず。形まことしげなれば、云ふ事も疑ひあらじと計り御信用候間、をもはざるに法華經の敵、釈迦仏の怨あだとならせ給ひて、今生こんじょうには祈る所願も虚むなしく、命もみじかく、後生ごしょうには無間大城をすみかとするべしと正しく經文に見えて候。

さて此の經の題目は習ひ読む事なくして大なる善根にて候。悪人も女人も畜生も地獄の衆生も十界ともに即身成仏と説かれて候は、水の底なる石に火のあるが如く、百千万年くらき所にも灯ともしびを入れぬればあかくなる。世間のあだなるものすら尚加様に不思議あり。何に況んや仏法の妙たえなる御法みのりの御力をや。我等衆生の悪業・煩惱・生死果縛ぼんのう しょうじ かばくの身が、正・了・縁の三仏性の因によりて即ち法・報・応の三身と顯はれん事疑ひなかるべし。「妙法の經力をもって即身に成仏す」と伝教大師も釈せられて候。心は法華經の力にては、くちなはの竜女も即身成仏したりと申す事なり。御疑ひ候べからず。委くわしくは見参げんざんに入り候ひて申すべく候と申させ給へ。

七月三日

日 蓮 花 押